

農業用水不足時における今後の水管理について

宮城県米づくり推進本部
令和6年7月11日

- 県内各地のダムでは、平年よりも貯水量が少ない状態が続いており、今後1か月の降水量が平年を下回った場合、8月に十分な農業用水が確保できなくなる可能性が高まっています。
- 出穂後30日頃までは、限られた用水で「**飽水管理**」を行い、ほうすいかんり土壤を湿った状態に保ちましょう。
- 「**飽水管理**」は、登熟期間が高温のとき、玄米の品質向上を図る技術としても有効です。

ほうすいかんり 飽水管理のメリット

- ◎限られた用水で実施可能
 - ◎根の活力維持
 - ◎地温の上昇抑制
 - ↳ 稲体の温度が夜間に下がるため、光合成により作られた養分が籾に転流しやすくなる。
- しろみじゅくりゅう どうわれりゅう
白未熟粒や胴割粒の発生を抑制できます

高温時のたんすいかんり湛水管理のデメリット

出穂期以降の夜温が高いと、「湛水管理」では夜間の水温がなかなか下がらないため、稲体の温度も下がらず、光合成で作られた養分を呼吸で消費してしまう。

⇒ 白未熟粒の発生を助長

(参考)飽水管理の方法

- ① 水尻を閉める。畦畔からの漏水がないか確認する。
- ② 田面が浸るくらい(ひたひた)に水を入れる。
- ③ 水を止めたら、水尻は閉めたまま、自然減水させる。
- ④ 水田の足跡に水がなくなる頃、又は番水のタイミングで次の水を入れる。

(目安は3~5日おき)

※出穂期前後は稲体が最も水を必要とする時期です。

飽水管理を徹底し、土壤を湿った状態に保ちましょう。

イメージ図

